

完本
丹下左膳

第三卷

林
不忘



仔細
Pew

下左膳

第三卷

林不忘



完本 丹下左膳 第三卷

¥ 450

1970年 5 月15日 初版発行 検印廃止

著 者 林 不 忘
© 長 谷 川 和 子
発 行 者 下 野 博
印 刷 暁 印 刷 株 式 会 社
株式会社 美術版画社

発 行 所 立 風 書 房

東京都品川区旗の台 6 の29の10

電話 東京 (786) 6561 (代表)

振替 東京 74493 〒 141

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0393-22103-8909

完本丹下左膳／こけ猿の巻（上） ■ 目次

伊賀の暴れん坊……………	5	妙な裁判……………	69
耳こけ猿……………	15	親なし千鳥……………	76
上様お風呂……………	20	血の哄笑……………	83
金魚簍……………	27	流れ星……………	105
恋不知火……………	38	旅の衣は……………	115
秘伝銀杏返し……………	44	右御意之趣……………	120
尺取り横町……………	49	足留め稲荷……………	137
お釈迦様でも……………	58	供命鳥……………	142

招かざる客……………	152
忍びの相手……………	163
お美夜ちゃん……………	171
里帰り……………	176
矢文……………	184
橋の上下……………	195
狼が衣を……………	203
名所松の廊下……………	209

うるさいねえ……………	217
開けてくやしき……………	233
引越蕎麦……………	241
子を取ろ子取ろ……………	252
ありがたく頂戴……………	271
扇子の虫……………	288
スクリーンの左膳 (加太こうじ)……………	291

装幀・口絵 伊坂芳太良

伊賀^いの暴^{あば}れん坊^{ぼう}

一

さっきの雷鳴で、雨は、カラッと霽^はれた。

往来の水たまりに、星がうつっている。いつもなら、爪^{つま}紅^{べに}さした品川女郎衆の、素あしなまめかしいよい闇だけれど。

今宵は。

問屋場の油障子に、ぱっとあかるく灯がはえて、右往左往する人かげ。もののしい宿場役人の提灯がズラリとならび、

「よしっ！ ただの場合ではない。いかげんに通してやるゆえ、行けっ！」

「おいコラア！ その振分はあらためんでもよい。さっさと失せろっ」

荷物あらための出役と、上り下りの旅人のむれが、黒い影にもつれさせて、わいわいいう騒ぎだ。ひがしはこの品川の木宿と、西は、琵琶湖畔の草津と、東海道の両端で、のぼり下りの荷を目方にかけて、きびしく調べたものだが、今夜は、それどころではないらしい。

ろくに見もせずに、どんどん通している。

大山もうでの講中が、逃げるようにとおろすぎで行ったあとは、まださほど夜ふけでもないのに、人通りはパツタリとだえて、なんとなく、つねとは違ったけしきだ。

それもそのはず。

八ツ山下の本陣、鶴岡市郎右衛門方のおもてには、抱き櫛の定紋うった高張提灯を立てつらね、玄関正面のところに槍をかけて、入口には番所ができ、その横手には、青竹の菱垣を結いめぐらして、まんなかに、宿札が立っている。

逆目を避けた櫓の一まい板に、筆ぶとの一行——「柳生源三郎様御宿」とある。

江戸から百十三里、伊賀国柳生の里の城主、柳生対馬守の弟で同姓源三郎。「伊賀の暴れン坊」で日本中にひびきわたった青年剣客が、供揃いいかめしく東海道を押してきて、あした江戸入りしよう、今夜この品川に泊まっているのだから、警戒の宿場役人ども、事なかれ主義でびくびくし

ているのも、むりはない。

「さわるまいぞえ手をだしや痛い、伊賀の暴れン坊と栗のいが」

唄にもきこえた柳生の御次男だ。さてこそ、何ごともなく夜が明けますようにと、品川ぜんたいがヒッソリしているわけ。たいへんなお客さまをおあずかりしたものだ。

その本陣の奥、燭台のひかりまばゆい一間の敷居に、いま、ぴたり手をついているのは、道中宰領の柳生流師範代、安積玄心斎、

「若！ 若！ 一大事出来——」

と、白髪あたまを振って、しきりに室内へ言っている。

二

だが、なかなか声がとどかない。

宿は、このこわいお客さまにおそれをなして、息をころしているが、本陣の鶴岡、ことに、この奥の部屋部屋は、いやもう、割れっかえるような乱痴気さわぎなので。

なにしろ、名うての伊賀の国柳生道場の武骨ものが、同勢百五十三人、気のおけない若先生をとまりまいて、泊まりかさねてここまで練ってきて、明朝は、江戸へはいろいろというのだから、今夜は安着の前祝い……若殿源三郎から酒肴がおりて、どうせ夜あかしとばかり、一同、呑めや唄えと無

礼講の最中だ。

ことに、源三郎こんどの束くんだりは、ただの旅ではない。はやりものの武者修行とも、もとより違う。源三郎にとって、これは、一世一代の婿入り道中なのであった。

江戸は妻恋坂に、あの辺いったいの広大な地を領して、その豪富諸侯をしのぎ、また、剣をとっては当節府内にならぶものない十方不知火流の開祖、司馬老先生の道場が、この「伊賀のあばれん坊」の婿いりさきなのだ。

司馬先生には、萩乃という息女があつて、それがかれを待っているはず——故郷の兄、柳生対馬守と、妻恋坂の老先生とのあいだには、剣がとり持つ縁で、ぜひ源三郎さまを萩乃に……という固い約束があるのである。

で、近く婚礼を——となつて、伊賀の暴れん坊は、氣が早い。さっそく氣に入りの門弟をしたがえて、出かけてきたわけ。

さきにおめでたが待っているから、陽気な旅だ。その旅も、今夜でおしまいだといふので、腕の立つわかい連中の大一座、ガヤガヤワイワイと、伊賀の山猿の吐く酒氣で、室内は、むっと蒸れている。

供頭役安積玄心齋の大声も、一度や二度ではとおらない。
牡丹餅大の紋をつけたのが、

「こらっ、婢おんなっ！ 北廓ほつかくはいずれであるか、これからまいるぞ。案内をいたせ。ははははは、愉快

とろんとした眼で見据しやくえられて、酌しやくに出ている女中は、逃げだしたい気もち。

面おもてずれ、大たぶさ、猪首いかびに胸毛——細引きのような白い羽織の紐が、詩を吟ずる。

玄心斎は、とうとう呶どせ声をあげて、

「しずかにせいっ！ わしがこうして、お部屋のとこから声をかけておるのに、貴様たちはなんだ。酒を飲むなら、崩れずに飲めっ！——若！ や！ 源三郎さまは、こちらにおいでではないのか」

師範代の玄心斎なので、一同は、ピタリッと鳴りをしずめて、キョロキョロあたりを見まわし、

「オヤ！ 若先生は、今までそこにおいでなされたが……はてな、どこへゆかれた」

三

さっき、到着のあいさつに、おもだった門弟のひとり、妻恋坂の司馬道場へ駆けぬけさせてやったのだが。

いまその者が、馳はせ戻ってのはなしによると……。

会わぬ、という。

しかるべき重役が出て、鄭重な応対のあるべきところを、てんで取次ぎもせぬという。

けんもほろろに、追いかえされた——という復命。意外とも、言語道断とも、いいようがない。約束が違う。聞いた玄心齋は、一徹ものだけに、火のように怒って、こうしてしきりに、主君源三郎のすがたを求めているのだが、肝腎の伊賀のあばれン坊、どこにもいない。

広いといっても知れた本陣の奥、弟子たちも、手分けしてさがした。

と……玄心齋が、蔵の扉まえにつづくあんどん部屋の前を通りかかると、室内から、男とおんなの低い話し声がする。

水のような、なんの情熱もない若い男の声——源三郎だ！

玄心齋の顔に、苦笑がのぼった。

「また、かようなところへ、小女郎をつれこまれて——困ったものだ」

とあたまの中で呟きながら、玄心齋、柿いろ羽織の袂をひるがえして、サッ！障子をあけた。「殿ッ！さような者と、トチ狂っておられる場合ではござらぬ。だいぶ話がちがいまするぞ」

夜なので、行燈はすっかり出はらって、がらんとした部屋……燭りをくらった手燭が一つ、ユラユラと揺れ立って、伊賀の若様の蒼白い顔を、照らし出す。

兄対馬守をしのぐ柳生流のつかい手、柳生源三郎は、二十歳か、二十一か、スウッと切れ長な眼が、いつも微笑って、何ごとがあっても無表情な細ながい顔——難をいえば、顔がすこし長すぎる

が、とにかく、おっそろしい美男だ。

今でいえば、まあ、モダンボーイ型というのだろう。剣とともにおんなをくどくことが上手で、その糸のような眼でじろっと見られると、たいがいの女がぶると嬉しさが背走る。

そして、源三郎、片っぱしから女をこしらえては、欠伸をして、捨ててしまう。

今もそうで、旅のうらない師というこの若い女を引き入れているところへ、ちょっと一目おかなければならぬ玄心斎の白髪あたまが、ぬうっと出たので、源三郎、中っ腹だ。

「み、見つかつては、し、仕方がない」

と言った。源三郎、吃りなのだ。そして、女を押し放そうとしたとき、

「門之丞めが戻りおって、申すには……」

言いかけた玄心斎、ぽうっと浮かんでいる女の顔へ、眼が行くなり、

「ヤヤッ！ 此奴はっ——！」

呻いたのです。

四

藍の万筋結城に、黒の小やなぎの半えり、唐繻子と媚茶博多の鯨仕立ての帯を、ずっこけに結んで立て膝した裾のあたりにちらつくのは、対丈緋ぢりめんの長じゅばん……どこからともなく、この

本陣の奥ふかく紛れこんでいたのだが、その自ら名乗るごとく、旅のおんな占い師にしては、すこぶる仇^{あだ}すぎる風俗なので。

「若は御存知あるまいが、この者は、妻恋坂司馬道場の奥方、お蓮さまの侍女^{こしもと}でござる。拙者は、先般この御婚儀の件につき、先方へ談合にまいった折り、顔を見知って、おぼえがあるのだ」

お蓮さまというのは、司馬老先生の若い後妻である。玄心斎の声を、聞いているのか、いないのか——黒紋つきの着流しにふところ手をした源三郎、壁によりかかって、その剃刀のように鋭い顔を、ニコニコさせて、黙っている。

「その妻恋坂のお女中が、何しにこうして姿をかえて、君の身边に入りこんでおるのか？ それ^げが、解^げせぬ。解^げせませぬ」

怒声をつのらせた玄心斎、

「女ッ！ 返事をせぬかッ！」

「うらないをしてもらっておったのだよ」

うるさそうな源三郎の口調、

「なあ女。余は、スス、水難の相があるとか申したな」

おんなは、ウフッ！ と笑って、答えない。

「爺^{ぢい}の用というのは、なんだ」

と源三郎の眼が、玄心斎へ向いた。

「司馬の道場では、挨拶にやった門之丞を、無礼にも追いかえましたぞ。先には、あなた様を萩乃さまのお婿に……などという気は、今になって、すこしもないらしい。奇っ怪至極——」

「女ア、き、貴様は、どこの者だ」

女のかわりに、玄心斎が、

「故あってお蓮様の旨を休し、若のもとへ密偵に忍び入ったものであらう。どうじゃっ！」

「お察しのとおり、ホホホホ」

すこしも悪びれずに、女が答えた。

「お蓮さまの一派は、継っ子の萩乃さまに、お婿さんをとって、あれだけの家督をつがせるなんて、おもしろくないじゃありませんか。それに、司馬の大先生は、いま大病なんですよ。きょうあすにも、お命があぶないんです。老先生がおなくなりになれば、あとはお蓮様の天下……ほほほ、それまでこの若様をお足どめして、かたがたようすをさぐるようにと、まア、あたしは、色じかけのお道具というところでしょうね」

「うぬっ、ここまでまいってかかる陰謀があらうとは——若っ、いかがなさるるっ」

と！ 瞬間、ニヤニヤして聞いていた源三郎、胡坐のまま、つと上半身をひねったかと思うと、その手に、ばあっ！ 青い光が走って、

「あウッ！」

いま^{かん}飲を通じたばかりの女の首が、ドサリ、血を噴いて、暈を打った。播磨^{はりま}大掾^{だいじょう}水無^{みずな}し井戸^{いど}の一

刀はもう腰へかえっている。
玄心齋、胆をつぶして、空^{くう}におよいだ。